

【氏名】 吉田めぐ美

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】

認知科学における人間知性に関する諸理論とハイデガー「世界内存在」の哲学

【研究の目的】

本研究の目的は、第一に、ハイデガーによる人間的知性についての理論が、認知科学の領域においてこれまでどのような観点からとり上げられ論じられてきたかという議論の流れをふまえた上で、その議論のさらなる進展をはかることである。そして第二に、そのようにして明らかにすることができた論点を、認知科学という領域に限定せずに、ハイデガー哲学そのものを全般的に解釈するという観点から、他の論点との連関などをも検討しつつ吟味し、幅広く展開することである。

【研究の内容・方法】

本研究では、まず、認知科学の分野の文献調査に集中的に取り組み、多様な議論に習熟すると同時に、どのような文脈でハイデガーの理論が論じられているかを概観した。その際の重要な論点は、ハイデガーの「世界内存在」という着想が、人間の日常的なふるまいの成り立ちを解明するにあたってどのような点で画期的であったか、そして認知科学の側がその衝撃をそのつどどのように受け止めてきたかという点であった。この調査によって、認知科学の議論の流れにおけるいくつかの段階それぞれにおいて、ハイデガーの理論が、認知科学による提案の批判者となったりあるいは逆にそれを擁護し支持するものになったりしながら、そのつど果たしてきた重要な役割を見てとることができた。次に、こうして獲得した理解を実際に議論の場で鍛え、新たな方向を探る機会を設けた。具体的には、デンマークのコペンハーゲンにある「主観性研究所」(Danish National Research Foundation: Center for Subjectivity Research)を訪れ、そこで開催された Anthony Rudd 教授 (St. Olaf College, Northfield, USA. 著書に *Expressing the World: Skepticism, Wittgenstein and Heidegger* などがある) の “Expression, Narrative and Selfhood” というセミナーに参加し、同席する研究者たちと、人間の自己の成り立ちをめぐって議論を行った。この議論を通じて明らかになったのは、人間の日常的ふるまいの構造を解明するためにハイデガー哲学が果たしうる役割を十全な仕方論じるためには、これまでの研究が十分に着目してきたとは言い難い彼に特有の時間論を徹底的に解釈する研究がいま最も必要である、ということであった。これを受けて、帰国後は、主観性研究所で行った議論を再検討しつつ、ハイデガーの時間論をめぐる新たな論文の作成に着手している。

【結論・考察】

ハイデガーは、人間がつねにそのつどの具体的状況のうちにおかれていること、そして、個々のふるまいは何らかの具体的文脈のなかではじめて成立するものであるということの内に、人間的知性を理解するための最も重要な基礎があると主張している。そのような全く新しい「世界内存在」という人間理解のモデルが、認知科学の文脈でそのつどさまざまな問題を提起し、理論形成に寄与してきた。本研究は、この議論をさらに発展させるためにはハイデガーの時間論の研究が必要であることを見出し、新たな研究への端緒へと導いた。他面でこのことは、ハイデガーの「世界内存在」という着想自体が未だ解釈の途上にある現状において、認知科学の文脈にとどまらずハイデガー哲学そのものを広く研究する上でも有意義なものであったと考える。今後は、ハイデガーの主著『存在と時間』とその周辺時期の講義録についての詳細な解釈を積み重ねることを通じて、時間論についての新しい研究成果に結びつけたい。そしてさらには、その成果をもって認知科学の文脈で新たな問題提起を行いたいと考えている。